

広島大学文学部
国語学研究室蔵

医心方卷第七影印並に釈文

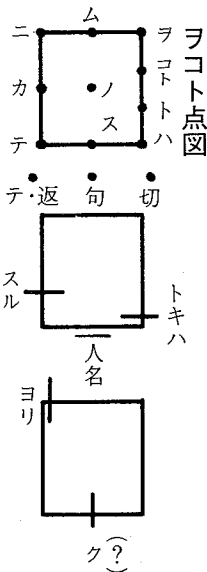
松
本
光
隆

広島大学文学部国語学研究室に、江戸時代に模写されたと思われる朱墨の訓点を有する医心方巻第七（以下広大本と略称する）一巻がある。縦二七・二種の楮紙を二十四紙継いだ卷子本で、外題は「陰瘡并殺道部」とあり、内題・尾題は「医心方巻第七」とある。近年修理され、本紙の裏打がなされ、原表紙に新表紙が継がれ、軸も新たに変わったものである。

広大本には奥書・識語がないが、宮内庁書陵部蔵医心方巻第七・安政版医心方巻第七（以下各書陵部本・安政版と略称する）と比較すると、形態的に（本文の字配り、虫損跡の模写、傍訓等）非常によく一致するので、書陵部本・安政版と同系統の模写本であると考えられる。書陵部本や安政版の成立事情や底本の素姓は、安政版の序、書陵部本・安政版の巻第八付載の奥書に詳しい。これに従えば、広大本は、江戸時代には和氣氏の末流半井家の所蔵であった藤原行盛と丹波重基との二系統の訓点を有する天養二年の移点本をもととした模写本であると考えられる。書陵部本には、巻末に「裔孫元堅謹命弟子館林杉本則行影摹」『久志本常貫謹校』との模写校合の識語があるが、広大本には、これに類するものもないので、模写の事情は明らかではないが、書陵部本と親子か兄弟関係にある模写本と考えられる。

広大本模写の背景には、江戸時代において医書の模写が盛んに行われたという事実があるものと思われる。例えば、医心方では右掲の諸書の他に、仁和寺医心方五帖が著名である。院政期の書写・加点と考えられるもので、奥書・識語がなく、その素姓は明らかではない。内閣文庫には、仁和寺蔵の医心方を模写したとする寛政三年の多紀元應の識語を有する、医心方十九卷十九冊と題末詳医書断簡一冊との計二十冊を一纏としたものが所蔵されている。現存の仁和寺蔵医心方五帖と内閣文庫所蔵本とを比較すると、内閣文庫所蔵本は、現存の仁和寺蔵医心方の模写本であることが判明する。又、大東急記念文庫には、内閣文庫所蔵の寛政三年の識語を有する模写本をさらに模写した文政三年の福山藩土伊沢信恬の識語を有する所蔵本がある。医心方の他、真本千金方に関しては、天保三年の跋を有する模刻本が存在する等の例を採っても、江戸時代に医書の模写・模刻が盛んに行われていたものと知ることができる。広大本の模写にもこうした背景があったものと考えられる。

広大本には、本文に、墨書の仮名・返点・声点・合符・音注・意義注・本文用字に対する書入と、朱書の仮名・ヲコト点・返点・声点・合符・庵点・意義注・本文用字に対する書入がある。ヲコト点は、明経点に一致する。これに加えて、黄筆の見消符と、一時書入れられて後に擦消された緑筆の音注・本文用字に対する書入がある。広大本の模写のもととなった天養二年の移点本の素姓は、書陵部本・安政版の巻第八の識語より明らかで、二系統の訓点が存在するが広大本におい



ても、右の朱墨の書き分けにより二系統の訓点を識別することができる。仁和寺蔵本には奥書・識語はなく、内閣文庫蔵の二十冊にも、寛政に先立つ識語がなく、その素姓は明らかではない。この点からも広大本の資料的価値は高い。又、安政版には、ヨコト点削除され、朱墨の書き分けもないから、広大本の資料的価値は、書陵部本と同等のものと考えられる。

釈文凡例

- 一、広島大学文学部国語学研究室蔵医心方巻第七の全文を、加えられた訓点に基づき訓読して釈文を作成した。釈文は、本来院政期に付されていたと考えられる訓点にのみ従い、後世の補筆と判断したものは採用しない。
- 一、釈文は、原本のヲコト点を平仮名で、仮名を片仮名で示し、私に補読したものは片仮名を（ ）に包んで示した。不読の漢字は（ ）に包んで示し、再読の二度目の読みも（ ）で包み右下に再読であることを注した。
- 一、原本のヲコト点・庵点を除いた朱書の仮名・符号は、*印を付して示した。
- 一、原本の符号のうち庵点は全例朱書であるので、特に注記していない。声点については、当該字の下に（平）等と注記した。
- 一、原本の割注は、（ ）に包み一行流しとした。
- 一、句読点は、原本に従い右下の「・」を「。」で、中下の「・」を「、」で示し、原本に存在しないものは私に補わない。
- 一、漢字の字体は、通行の旧字体に従い、片仮名の字体は、現行の字体に改めるのを原則とした。
- 一、原本の本文に付された注記類のうちの頭注は、釈文末に注記した。
- 一、釈文の作成において、書陵部蔵医心方巻第七との異同が存在するものは、釈文末に注記した。

醫心方卷第七

從五位下行鍼博士兼丹波介丹波宿禰康賴撰

陰の瘡を治(スル)、方第一 陰の蝕^シ瘡盡(キム)と欲^スるを治(スル)方第二 陰の癢^{カユル}を治(スル)方第三「陰莖^{ハレ}ノ腫^{ハレ}痛^キ」を治(スル)方第四 陰ノ囊^{フクリ}陰囊^{フクリ}ノ腫(レ)痛(キ)を治(スル)方第五 陰ノ

卵ノ腹に入(リ)て急痛(キ)を治(スル)方第六「陰ノ囊(ノ)濕^シリ痒^{カユ}ルを治(スル)方第七 類^ヒ陰ノ類^ヒ」を治(スル)方第八 脫^ニ肛^{イソ}を治(スル)方第九「殺道^シ」癢^{カユ}を治(スル)方第十 殺^シ

道ノ赤(ク)痛(キ)を治(スル)方第十一 殺^シ道(ノ)「殺道^シ」癢^{カユ}を治(スル)方第十二 殺^シ道(ノ)「殺道^シ」癢^{カユ}を治(スル)方第十三 疔^ヒ蜜^ミを治(スル)方第十四 諸(ノ)痔^シを

治(スル)方第十五「九虫^クを治(スル)方第十六 三虫^サを治(スル)方第十七 寸白^シを治(スル)方第十八「蛔^ヒ虫^チを治(スル)方第十九 繞^ヒ虫^チを治(スル)方第二十

陰(ノ)瘡^シを治(スル)、方第一 ●病源論(ニ)云(ク)、腎^腎は「於」陰^陰に營^營(ス)。腎ノ氣虛(シクシ)て津ノ液を制(ス)こと能(ハ)不^レは、「不^レ制(ス)こと能(ハ)不^レ」津ノ液ナレハ「則」汗ノ濕(ス)。「虚(シク)」は「則」風ノ邪(ノ)爲(ニ)、乘(セ)所(ル)。「邪、湊ノ理に容(リ)而正^ス氣、氣を正(ス)泄^シサ不^レは、邪ノ正、相干^スて皮ノ膚に在(リ)」。故に癢^{カユ}ル、之を搔^カケハ、「則」瘡^カを生(ス) ●葛氏(カ)方(ニ)、男子(ノ)「陰ノ瘡^カ爛^タル、を治(スル)方、黄蘗^クを削^クて煮^テて「以」洗(ヘ)之」。洗(フ)之「之」日に十一過

●又方(ニ)狼^ム牙^ツ草^ナ(ノ)「根^ネを煮^テて「以」洗(ヒ)漬(セ)之」。洗(ヒ)漬(ス)之「之」日に

15

に五六過（今案（スルニ）様要方に狼牙ニ把水四升） ●又方（ニ）黄^{（五種）}一連、「黄^{（キハタ）}藥、分一等（シ）て搗（キ）て肥^{（フ）}エタル猪（ノ）共ノ汁を以て之を煮て『煮^{（ネ）}ル』』滓^{（カス）}を去（テ）て「以」漬^{（ヒ）}セ「之」『漬^{（ヒ）}ス「之」』。復、
 「此の二物を搗^{（ツ）}イテ絹（モ）て『絹^{（シ）}』』篋^{（シ）}下^{（シ）}して「以」瘡^{（ウ）}に粉^{（コ）}ケヨ。日（ニ）五（タヒ）六（タヒ）。
 又陰（ノ）蝕瘡を治（ス）。又方（ニ）地榆^{（トヒス）}「地一榆」を「煮て」以「洗^{（ヒ）}ヒ漬^{（ヒ）}」之^{（ヒ）}「漬^{（ヒ）}ス」之^{（ヒ）}。甘一
 草を合（ス）、尤（モ）佳（シ） ●范汪（カ）方（ニ）、人（ノ）陰（ノ）「頭斷（チ）て瘡を生（ス）を
 治（スル）、方 蕪^{（ア）}菁^{（ナ）}一把を、切（リ）て水（モ）て煎^{（ネ）}（ラ）令（メ）て之を食（セヨ）」「様要方（ニ）、
 陰（ノ）瘡を療する方 黄^{（三）}連三分 胡^{（一）}粉一分 葵^{（キ）}黄^{（タ）}「三分 散^{（シ）}に『散^{（シ）}』』爲^{（シ）}て瘡の上に傅^{（ツ）}ケヨ『傅^{（ツ）}ク』
 ●集驗方（ニ）、云（ク）陰ノ患一瘡の方 蜜を以て甘一草（ノ）末を「煎シて之を塗^{（シ）}レ。『煎シて』甘一草
 末（キ）て之を塗^{（シ）}ル』良（シ） ●又云（ク）陰（ノ）頭に、瘡を生（シ）て安一石一榴ノ「花の如
 く（シ）て大（キナル）者捲^{（ク）}の如（ク）ナル方 虎ノ牙、犀ノ角、刀を（モ）て刮^{（ク）}ケて末（キ）て猪ノ膏^{（ウ）}
 を以て煎（シ）て色を變^{（セ）}令（メ）て滓を去（ケ）て日に三（タヒ）塗^{（シ）} 『塗^{（シ）}ル』 又方（ニ）烏賊魚^{（イ）}
 骨を以て末（キ）て之を粉^{（コ）} 『粉^{（コ）}ク』良（シ） 「又方（ニ）鱉^{（カ）}ノ甲を、燒（キ）末（キ）て鶏一子一
 白を以て和（テ）て之を傅^{（ツ）}ケヨ 『傅^{（ツ）}ク』良（シ） ●隨時方（ニ）、陰の「患瘡を治（スル）方 薤^{（シ）}（ノ）白^{（シ）}『薤^{（シ）}白』』
 を取（リ）て蘇^{（ソ）}に和（テ）て之を傅^{（ツ）}ケヨ 『傅^{（ツ）}ク』。齒日に、即（チ）差（ユ） ●千金方（ニ）陰に瘡を生（ス）
 を治（スル）方 地榆^{（トヒス）}八兩 黄藥^{（キ）}八兩 二味、水「一斗五升を以て煮て六升を『六升』』取（リ）て滓を
 冷一暖を適（ヘ）て用（申）て瘡を洗（ヘ）。日に再（ヒ） ●又云（ク）「妬一精一瘡は「者」『者』』
 男子は陰ノ頭^{（ウ）}の節ノ下に在（リ）、婦人は玉一門の内に在（リ）。並^{（ナ）}、「甘一瘡に似て治大（イ）に、痛（キ）

25

男子は陰ノ頭^{（ウ）}の節ノ下に在（リ）、婦人は玉一門の内に在（リ）。並^{（ナ）}、「甘一瘡に似て治大（イ）に、痛（キ）

灰に作(シ)て傳(ケヨ)【之】

●又云(ク)男子の陰の頭に、「瘡を生(シ)て精ネコトメカに【精ノ】食(ヒ)

鬻(ヒ)て盡(キム)と欲(ス)る方 當歸カマギ、夕藥トスヤク、黃芩ワウキン、朮射香ヂツセウカウ「白粉ハクコ、湯ツクに爲(テ)一(タヒ)、之を洗(ハ)【洗(ヒ)】

●令(カ)方(ニ)、陰(ノ)蝕(シ)治(スル)、蒲黃散(ノ)方「蒲黃ホウワウ二兩、桐キノ皮カ二兩、甘草二兩、凡

(ソ)三物、搗(キ)篩(ヒ)て創の「上に粉(ケヨ)。三(タヒ)に過(キ)不(シ)て愈(ユ) ●十

金方(ニ)、陰(ノ)蝕瘡を治(スル)方 肥(エタル)猪ノ肉を水「三升を以て肉を煮て極(メテ)爛(サ

令(メ)て肉を去(ケ)て極(メ)物熱(カラ)令(メ)て使(チ)、以(モ)て瘡(ノ)中(ニ)灌(イ)【灌(ル)】。【即

(チ)愈(ユ) 又方(ニ)雄黃二分、硃石二分(燒(ケ)) 麝香半分、三味篩(ヒ)て【以(チ)瘡(ノ)

上に粉(ケヨ) ●虫人ノ陰(ノ)莖、并(セ)て囊(シ)を食(ヒ)て盡(キム)と欲(ス)るを治(スル)方 鯉ノ骨

を燒(キ)て灰に【灰(シ)】爲(シ)て黃(ノ)葉の汁に和(テ)て塗(レ)【之】 又方(ニ)鮡魚を燒(キ)

て醬(シ)汁シユに和(テ)て塗(レ)【之】

●陰の瘻(カ)を治(スル)方第三

●病源論(ニ)云(ク)、夫(レ)、虚(ノ)勞(スル)ときは【虚(ノ)勞(シ)て】腎の氣を損(ヒ)て足(ヲ)不(ス)。

故に陰、冷(エ)て汗(ハ)液自(ラ)泄(ル)。風(ノ)邪、乘(ル)ときは【之】、【乘(リ)】之【則】、極(キ)、

瘻(ル) ●錄驗方(ニ)陰の瘻(リ)て瘡多(クシ)て少(シ)汁有(ル)【者を治(スル)、汁有(ル)】

を治(スル)【者】方 黃蘗を煮(タル)、汁を、【黃蘗(ノ)汁を煮(テ)】冷(シ)て洗(ヒ)漬(シ)て

蛇床子ヒルムシロ、黃(ノ)連(ノ)末を俾(ツ)【俾(ク)】●新錄要方(ニ)、陰瘻【瘻(リ)】て水出(テ)て差(ユル)

こと能(ハ)不(ル)、者を治(スル)方、干薑カンキヤウ末(キ)【干薑末(キ)】之を粉(ケ)【ヨ】粉(ク)】

「又方(ニ)水を(モ)て煎菁(ノ)子を煮て洗(ヒ)、并(セ)て末(キ)て上に粉(ケ)ヨ^イ粉ク^ク」
 又方(ニ)杏^{カモ}ノ人を、焼(キ)て油を取(リ)て之を塗(レ) 又方(ニ)水(ヲ)モテ^ナ棘^トノ針^ヲを煮て洗(ヘ)之^之 又方(ニ)水(ヲ)モテ^ナ桃^トノ皮葉を煮て洗(ヘ)之^之 又方(ニ)薤^ニノ白^ニ薤^ニ白^ニを取(リ)て搗(キ)て汁(モ)て汁^ヲ塗(レ)之^之 又方(ニ)脊^脊ノ窮^窮骨^骨窮^窮骨^骨を灸(セヨ)。

60

龜一尾と名(ツク)。「年に依(リ)て壯(セヨ)七壯。又足の大指の叢毛の中を灸(セヨ)多サ、七壯(三)至(レ)並(ニ)良(シ)」「様要方(ニ)、陰(ノ)痒^痒」「痒^痒リ」濕(ヒ)て瘡を生(シ)て年(ヲ)歴(ル)トモ、差(エ)不(ル)を治(スル)方 桃^桃ノ核^核ノ中人を、焼(キ)て末(キ)て七枚を服(セヨ)。「服(スル)シ」と日(ニ)三(タヒ)廿^三枚を服(シ)て三日に愈(ユ) 又方(ニ)胡麻を嚼^嚼ムて瘡^瘡に傳(ケ)ヨ^イ傳^ク。四五度^度に「過(キ)不(シ)て愈(ユ) 龍華方(ニ)、男子の陰の下(ノ)創^創の癢(リ)濕(フ)を治(スル)方「白^白粉^粉一分 干^干薑^薑三分 牡^牡蠣^蠣三分、三物下(シ)篩(ヒ)て卧^卧サムト欲^欲ル、時に粉(ケ)ヨ^イ粉^ク」。夜に三四(タヒ)、之を粉(ケ)ヨ 効驗方(ニ)、牡^牡蠣^蠣ノ散^散ノ男子の陰の下、痒^痒リ濕^湿フを治(スル)方「牡^牡蠣^蠣三分 干^干薑^薑三分 凡(ソ)ニ物、下(シ)篩(ヒ)以^以粉(ケ)ヨ。日にニ(タヒ) 僧深方(ニ)、陰(ノ)下濕(ヒ)痒(リ)て瘡を生(ス)を「治(スル)方 吳^吳茱^茱萸^萸一升、凡(ソ)一物、水三升を以て三沸を「煮て」煮^煮て三沸(シ)て「以^以滓^滓を去(ケ)て瘡を洗(ヘ)」。瘡を洗(ハ)ば愈(ユ) 又方(ニ)溝^溝黃^黃瘡^瘡ノ上に粉(ケ)ヨ^イ粉^ク。日に三過。即(チ)愈(ユ) 又方(ニ)甘^甘草^草一尺、凡(ソ)一物^{一物}を、水五升を(モ)て煮て三升を「三升に」取(リ)て洗^洗一漬^漬(セ)之^之。「洗^洗一漬^漬(ス)三(タヒ)と之^之」日(ニ)三(タヒ)。「三(タヒ)」「便(チ)愈(ユ)神(タ)

65

70

良(シ) ●耆婆(カ)方(ニ)、人の陰の下痒(フ)を治(スル)方 蛇床子(ヒルムシロ)、蛇(ネ)、床子(シロ)を、末に作(シ)て「米ノ分粉(ハ)に和(テ)て之少々、之を粉(ケ)ヨ」粉(ツ) ●刪繁論(ニ)、陰に濕(瘡を生(ス))を治するに、包(用(ル)) 石流黄(ウヅク)、末(キ)て之を「傅(ケヨ) ●集驗方(ニ)大人、小兒の【小兒(ウ)】陰莖の痒(ユ)りて汁出(ツル)を治(スル)方、生(シ)キ大豆(ト)を取(リ)て皮を「刮(ク)去(ケ)て煎(ル)ク」嚼(ガ)ムて之を塗(レ) ●本草拾遺(ニ)云(ク)、牡蠣ノ殻(ヒキ)、麻黄ノ「根(ネ)、蛇床子(ヒルムシロ)、干薑(カン)に和(テ)て粉(ニ)爲(ル)は陰(ノ)汗(ヲ)去(ク)」

●陰莖(ノ)腫(レ)痛(キ)を治(スル)、方第四

●病源論(ニ)云(ク)、陰腫(腫(レ)陰腫(ノ))候(ハ)此(レ)、風(熱)、於(於)腎ノ經(ニ)容(リ)、於(於)陰(器)陰(ノ)器(ニ)に流(ル)に由(リ)て「腎虚(シクシ)て宣(散)すること能(ハ)不(ル)故(ニ)腫(ヲ)致(ス) ●范汪(カ)方(ニ)、卒(ニ)陰(ノ)腫(レ)て死(ナム)と欲(ス)るを治(スル)方「急(カ)に下(藥)を服(シ)て大(イニ)下(サ)使(ム)レハ、即(チ)佳(シ) 又方(ニ)烏賊(魚)骨(ヲ)末(キ)て粉(ツ) 又方(ニ)蛇(床)子(ヲ)を「末(キ)て鷄(子)黄(ニ)和(テ)て傅(ケヨ)之」 ●葛氏(カ)方(ニ)、陰(莖)の頭(ノ)急(カ)に腫(レ)て「瘡(生)シ」て汁(ノ)出(ツル)を治(スル)方 濃(ク)、黄蘗(ヲ)煮(テ)汁(ヲ)管(ノ)中(ニ)シ(テ)漬(ス)之」 ●又方(ニ)濃(ク)、水(ヲ)楊(ノ)葉(ヲ)煮(テ)管(ノ)中(ニ)シ(テ)温(カ)シテ漬(セ)之」 ●又方(ニ)當歸(三分)、黃連(三分)、小豆(一分)、凡(ソ)三物、搗(キ)篩(ヒ)て「以(上)に粉(ケ)ヨ」 ●又方(ニ)杏(ノ)人(ヲ)、鷄(子)白(ニ)和(テ)て塗(レ)之」 ●又方(ニ)豉(三)粒(ヲ)「燒(キ)粉(ク) 又方(ニ)杏(ノ)人(ヲ)、鷄(子)白(ニ)和(テ)て塗(レ)之」 ●又方(ニ)牛(ノ)矢(ヲ)を燒(キ)て末(キ)て之(ヲ)傅(ケヨ) ●又方(ニ)白(蜜)を以(テ)塗(レ)之」 ●又方(ニ)牛(ノ)矢(ヲ)を燒

(キ)て「末(キ)て苦一酒ヲ苦酒ニに和(テ)て塗(レ)之」 ●又云(ク)陰莖ノ怒(キ)に腫(レ)

痛(クシ)て忍(フ)可(カラ)不(ル)方 雄黃「燧石、各二兩甘草三尺。水ニ斗を(モ)て煮て二升

を取(リ)て「以」之を潰(セ) ●又云(ク)卒に「陰痛(クシ)て列サス如(クシ)て汁出(ツル)

こゝ雨の如(キ)を治(スル)方 小蒜一升、韭(ノ)根一斤、楊柳ノ根「一斤、右三物合一燒(キ)て

酒を以て灌(キ)之」て熱ヲ及ヲ「及」熱ウシテケ氣を以て陰を蒸セテ蒸スル (千金方同(シ)之)」

●千金「方(ニ)陰ノ腫(レ)痛(キ)を治(スル)方 萹菜(ノ)根を搗(キ)て付(ケヨ)之」 又

方(ニ)酒(モ)て桃一人の「末(キ)タルを服(セヨ)彈丸を末彈丸ヲを服(セヨ)大(クシ)て

三(タヒ)服(セヨ) ●又云(ク)玉一莖(ノ)痛(キ)方、甘草、石一蜜一末(モ)て乳に和(テ)

て洗ハ洗フ之」 ●龍華方(ニ)陰(ノ)頭腫(レ)て潰ユ敗(レ)壞ル、を治(スル)方 甘一

草一分、「烏頭ト頭ト一分、夕藥一分、敗醬二分、四物、切(リ)て水四升を以て煮て三升を三升ニ取

(リ)て洗(ヘ)之」日(ニ)三(タヒ) ●陰莖(ノ)頭ノ腫(レ)て創を生(シ)て黃(ナル)汁出

(ツル)を治(スル)方「干薑を末ト搗(キ)て上に傅(ケ)ヨ傅ク」再(ヒ)三(タヒ)に過(キ)

不(シ)て即(キ)愈(ユ) ●新録單方(ニ)「陰(ノ)腫(レ)瘡(キ)を方桃一人を搗イて泥ニ

爲(シ)て水若ほ酒に和(テ)て塗(レ)之」數易フ。差(エハ)止(メヨ) ●又方(ニ)蔓ナ善ノ

子、并(セ)て根を末(キ)こ之を對ス對ス ●枕中方(ニ)男子の陰(ノ)腫(ルル)を治(スル)

方、竈ノ中(ノ)黃ナル土を「以て酒を以て和(テ)之」て其(ノ)上に塗(レ)立チトコロニ愈(ユ)。

驗有(ル)

●陰囊ノ腫(レ)痛(キ)を治(スル)方第五

●千金方(二)、陰囊(ノ)腫(レ)痛(キ)を治(スル)方 酢に麵を和(テ)て塗(レ)之」 ●又方(三) 酢に、熱(フツ)灰を和(テ)て熨(セ)之」 ●又方(三) 釜月下土(ノ)釜月下土(ノ)を、鶏(子)子(子)白に和(テ)て付(ケ)ヨ」之」 ●葛氏(カ)方(三) 男(子)子(子)陰卵(ノ)卒(ニ)腫(レ)痛(キ)を治(スル)方 牛ノ矢を焼(キ)末(キ)て苦酒を以て和(テ)て傅(ケ)ヨ」之」 ●又方(二) 蛇(一)末(子)末(キ)て鶏(子)子(子)黄に和(テ)て傅(ケ)ヨ」之」 又方(三) 蕪(一)青を搗(キ)て塗(レ)之」 ●又方(三) 足(ノ)大指(ノ)第二節(ノ)横(ナル)文理(ノ)正(二)中央(一)を「灸(セヨ)」。五壯。佳(シ) ●醫門方(二)、

陰卵(ノ)腫(ルル)を治(スル)方、桂心(ノ)末を以て「以」桂心(末)末(キ)て之を塗(レ)之。佳(シ) (シ) 又方(二) 大黄を末(キ)て酢に和(テ)て塗(レ)之」。並(ニ)佳(シ) ●又方(二) 巨(カ) 莢(取)取(リ)て炙(テ)皮(去)ケ」て子(末)末(キ)て水に和(テ)て塗(レ)之」。立(チ)トコロ(ニ)消(ユ) ●又云(ク) 卒に陰(卵)腫(レ)て疼(キ)痛(ク)シ」て忍(フ)可(カラ)不(ル)を「療(スル)方 足(ノ)大指(指)ノ頭(を)灸(セヨ)」。瓜(ノ)甲(を)去(ル)こと、韭(ノ)葉(ノ)如(シ)。年(に)隨(ヒ)て壯(セヨ)。

右(ノ)核(腫)腫(レ)は右(を)灸(セヨ)。左(腫)腫(レ)は左(を)灸(シ) 兩(核)俱(に)腫(レ)は俱(ニ)之(を)灸(セヨ)。一(宿)愈(ユ) ●又方(二) 玉莖(ノ)頭(頭)を以て下(に)向(ケ)て囊(ノ)縫(を)正(シ)て莖(ノ)頭(に)點(シ)て縫(ノ)上(に)當(テ)て三(壯)灸(セヨ)。(或(ハ)七(壯)即(チ)消(ユ) ●博(洛)安(衆)方(三)、

久(シク)、卑(濕)冷(處)に坐(立)スル)とき(は)忽(チ)に陰(囊)虚(シク)腫(レ)て氣(上)リ)て人(ヲ)築(ク)を「治(スル)方 「右(米)ノ)酢(を)以て黒(豆)を炒(テ)青(キ)布(に)裏(ミ)て心(腹)を熨(セ) ●集

驗方(三)、卒(三)卵(ノ)腫(ルル)を治(スル)方 蕪ウに、桃(ノ)人を搗(キ)て付(ケヨ)「之」。
 煇ハカハカは「煇ケハ」則「易(ハヨ)」。易(ハハ)」。亦、婦人(ノ)陰ノ腫(ルル)を治(ス)。「玄女經(二)云(ク)、男子(ノ)陰一卵(ノ)腫(ルル)を療(スル)方 桃(ノ)人を取り搗(ク)に、皮、尖ホトトギスを去(ケ)、皮ヒを去(ケ)尖、并(セ)て雙フタヘ人アルを筒フツ「除ステテ熬ヒリテ色を變(セ)令(メ)て末マに作ナシテ丸(カシ)て彈ヒ丸の如(クシ)て酒(モ)て服(セヨ)「之」

115

●陰卵インリョウノ、腹ハに入(リ)て急(カニ)痛(キ)を治(スル)方第六

●葛氏(カ)方(二)、陰一丸ノ卒に縮ツマ(リ)て腹に入(リ)て急一痛(シ)て死(ナム)と欲スるを、名(ツケ)て陰一疝インゼンと曰(フ)を治(スル)方「死(ナム)と欲スるを治(スル)名(ツケ)て陰一疝(ノ)方」曰(フ)「狼毒ヤマトク四兩、防葵ヤマイ一兩、附子フジ二兩、右三物、蜜(ニ)丸(カシ)て服(セヨ)」。服(スル)「之」と梧コノ子シ如カ(シ)て「三丸」。三丸サン。日夜(ニ)三過。●玄女經(二)、房勞シ、卵腫リョウシュレ、或は縮ツマ(リ)て腹に入(リ)て「之(腹)ノ」中絞(ル)ゴトクに痛(クシ)て「絞一痛(クシ)て」或(ハ)便(チ)、氣絶(エ)て「便ハ氣絶(エ)て」死(ナム)とするを療(スル)方 婦人(ノ)經月ノ布、衣ノ血「有(ル)者を取(リ)て湯(モ)て」湯ニ洗フて汁を取(リ)て服(セヨ)「之」(今案(スルニ)醫門方(ニ)灰ハイに爲(シ)て酒(モテ)服(セヨ)方寸(ノ)匕) ●又方(ニ)婦人の「陰の上(ノ)毛ニ七莖シチを取(リ)て灰ハイに作(シ)て井イ一華カ一水スイを以て服(セヨ)「之」

120

●陰囊インナウの濕シツリ痒カルを治(スル)方第七

●葛氏(カ)方(三)、陰囊ノ下カの濕(リ)痒(リ)て「痒(リ)」。皮ヒノ剝ハクルを治(スル)方 酸漿ホトツキ、地榆

(ノ)根、「及(ヒ)黄蘗を煮タル、汁をモツテ酸漿煮^ウ地榆(ノ)根、及(ヒ)黄蘗(ノ)汁を(モ)て洗(ハ)。(皆良(シ))

●又方(ニ)栝^ヒノ葉、塩各一升合煎^シて合(セ)て煎^シて以^テ之を洗^ヒ畢(リ)て蒲黄^{フヤウ}を取^リて傅^ツク之^ヲ

●又方(ニ)槐(ノ)枝を煮て以^テ洗^ヒ(ハ)之^ヲ

又方(ニ)「大麻(ノ)子を嚼^ミて傅^ツク之^ヲ」

又方(ニ)濃^ク、杏^{イヌナギ}菜^{サイ}を煮て洗^ヒ(ハ)之^ヲ

●醫門方(ニ)、陰囊ノ下(ノ)濕(リ)痒(リ)て搔^キ破^ラは搔^カケハ破^レレ^ト水出^テ乾^カケは即(チ)皮ノ剝^ハケ起^オケルを「療^スル」方 地榆^{チヨ}、黄蘗^{ワウ}、蛇床子^{スヅク}、(各二兩)槐ノ白皮切^リて一升。水七升を(モ)て三升を取^リて「暖^クカに(シ)て以^テ瘡^ヲを洗^ヒ(ハ)」。日に三四度。魚鮓^{イサ}を食^フ(スルコト)勿^レ

●玉房秘決(ニ)云(ク)、「陰囊(ノ)下(ノ)濕(ル)を治^スル」散方 麻黄三兩、蛇床子二兩、夕藥^{セツヤク}、ター藥^{ターヤク}三兩、「黄連三兩、棗米一升、梛(キ)末(キ)て粉^ケケヨ」之^ヲ。●又方(ニ)干薑、黄連、「牡蠣^{ボウキヤウ}」(各五分)棗米八分、梛(キ)篩^ヒて以^テ之^ヲ粉^ケケ。●又方(ニ)菴^{カウ}蘭^{ラン}ノ子^ヲ末^キて傅^ツク之^ヲ

●陰^ノ頰^ヲ ^{婦人陰腫言瘰癧下頰之} 陰ノ頰^ヲを治^スル方第八

●病源論(ニ)云(ク)、「頰病(ノ)之^ノ状^ハ陰核^ノ腫^レ大^キクシて時^々小^シク^シ」

ムコト有^リ。(ム)時^々終^ニに、常^於大^キナリ。勞^ニ冷^スレは勞^ニ冷^シて陰^ノ兩^便(チ)發^ス。

●發^スは「則^チ」脈^一大^ナリ。人^(ノ)腰^ヲ脊^ヲを^使て攀^リ急^シ、身^體惡^寒(シ)、骨^節沉^重ナラ^使。

●使^スは「使^ス」此^(ノ)病^{「於」}腎^ヲを損^{セル}(ニ)由^ル也[」]。足^ノ少^陰ノ之^ヲ經^ハ、腎^(ノ)之^ヲ脈^{「ナリ」}也[」]。其^(ノ)氣^下(リ)て於^テ陰^ニ通^フ。陰^ハ宗^脈ノ之^ヲ聚^ル所^{、積陰}ノ之^ヲ

140 氣(ナリ)「也」。勞傷舉重(シ)、「於」少陰(ノ)「之」經を傷(フ)。其(ノ)氣「下(リ)て」「於」陰に衝

(リ)て氣脹(レ)て通(ハ)不。故に頰を成(ス)「也」 ●小品方(三)壯一丹一五「痔散は頰一疝(シ)。

陰一卵、偏(ニ)大(キ)に(シ)て氣有(リ)て上(リ)下(リ)て脹(レ)大(キクシ)て行(キ)

走(ラ)は腫(レ)大(キクシ)て妨を「爲(スヲ)治(ス)此(ノ)方を脹(セヨ)」「服(セ)」「長

(タ)驗(アリ) 壯一丹(心去(ケヨ)防風、桂心、豉ノ熬レル、黄「蘗 各一分、凡(ソ)五物

治(キ)下(シ)筋(ヒ)て酒(モ)て服(セヨ)一「刀圭上」廿日(ニ)愈(ユ)。

少小(ノ)頰一疝(ヲ)「治(スルニ)最(モ)良(シ)」。嬰兒は乳の汁を以て和(テ)て大豆の如(クシ)

て與(ヘヨ)「之」。「長一宿の人は服(セヨ)方寸(ノ)匕 ●又云(ク)男ノ頰、「頰(ハ)腸頰、卵脹有

(リ)」。有(リ)「水」頰氣頰四種有(リ)。腸頰、卵脹は差(エ)難(シ)。「難(ク)」「氣頰、水頰は針

灸スレは「則」差(エ)「易(シ)」「也」 ●又云(ク)男(ノ)陰卵の偏(ニ)大(キナル)頰(ノ)方

有(リ)并(ミ)を灸シ、并(セ)て關一「元を灸(セヨ)百壯 ●又方(ニ)五一泉を灸(セヨ)百壯。關一「元

の下一寸に在(リ)。又方(ニ)足の「大陽を灸(セヨ)五十壯」「五十壯」并(セ)て足(ノ)大陰(ヲ)

灸(セヨ)五十壯。驗有(リ) ●又云(ク)頰病(ム)に、「病(ミ)」「陰卒に腫(ルル)者の方

足を合(レ)並(ヘ)て兩(ノ)大指を縛(フ)て爪を令(ヒ)並(ヘ)令(メ)て艾丸を以て「兩(ノ)爪

(ノ)端の方一「角ノ處を灸(セヨ)一丸。頃(チ)に、兩(ノ)爪(ノ)角(ノ)上に在(ラ)令(メヨ)

「也」。丸ノ半を令(一)「爪(ノ)上に上(セ)令(メヨ)佳(シ)七壯灸(セヨ)愈(ユ)」「已上千金方同

(シ)」「之」(シ) ●千金方(二)云(ク)卵偏一「大に(シ)て上(リ)て腸に入(ル)方 三、陰一交を灸

(セヨ)。内ノ蹠(ノ)上ハ寸に在(リ)。年に隨(ヒ)て壯(セヨ)。「又云(ク)頰を治(スル)方 楊柳(ノ)枝を取(リ)て脚ノ大(キサ)の如(ク)シ)て指ノ大(キサ)長(サ)三尺ナル^{*}廿枚。水(ヨモテ)「煮て熱(カラ)令(メ)て故キ布^ヲ及(ヒ)氈^ヲを以て腫^レタル處に掩(ヒ)て熱(キ)枝を取(リ)て更^ニ牙(シ)柱^ヲ「柱フ」之」。此(ク)ノ「如(ク)シ)て」如(ク)ハ「差(ユル)を取(レ)」。又云(ク)頰一疔(シ)、卵偏(ニ)大(キク)シ)て氣上(リ)下(リ)て脹^ル、方。牡丹一分、「防風一分 二味酒(モ)て服(セヨ)。方オ(ノ)ヒ。日にニ(タヒ)」。葛氏(カ)方(ニ)入超(躍)シ、「攀(一重)シ)て卒に陰(頰)を得(ル)を治(スル)方 兩(ノ)足ノ大指ノ外ノ白(一)突ノ際^ニ陷^スナル「中を灸(セヨ)。艾(一)丸を令て半は爪(ノ)上に在(リ)、半は突(ノ)上に在(リ)令^ス」。七壯(范注(カ)方同(シ)「之」)

●又方(ニ)藉を以て口ノ廣(サヲ)度^リ度^リ倍(キ)「之」て度を申(ネ)て「以」小腹を約^メて大(キナル)横理^ニ中^テ「小腹(ノ)中ノ大(キナル)横理^ヲを約^メて」中央を令て正(ニ)齊^ニ對(ハ)令(メ)て乃(チ)、兩(ノ)頭及(ヒ)中央三處を灸(セヨ)。年に隨(ヒ)て壯(セヨ)。善(ミテ)自(ラ)養(ヒ)て言^ハ咲(シ)、「勞動(スル)こと勿(レ)」。《千金方同(シ)「之」》。又方(ニ)白朮五分 地膚(ノ)子十分 桂心三分「右三物搗(キ)末(キ)て服(セヨ)」。服(スル)「と」刀圭。日(ニ)三(タヒ)

●脱肛^ヲを治(スル)、方第九

●病源論(ニ)云(ク)、脱肛(トイフ)は「者^ハ肛^ノ門^ノの脱(ケ)出(ツルナリ)也」。多(ク)、久(一)利^ニ由(リ)て大(腸)虚(シ)ク冷(エ)て「爲^ル爲^ル」所ナリ。大腸虚(シク)シ)而「於」寒利^ニに傷(ヒ)而「傷(ヒ)」而「シ)て」氣唾^ヲを用(ヅル)ときは、其(ノ)氣下(リ)衝(キ)て「則」、「肛、脱(一

出(ス)。因て脱肛と謂(フ)「也」。

●千金方(ニ)云(ク)、脱肛には重(キ)を擧(ケ)、帶を急すること
 を禁(セヨ)。房室を「斷(チ)て周一年ナレは乃(チ)佳(シ)」

●梅略方(ニ)、脱肛には重(キ)を擧
 (ケ)、滑ナル物を食(シ)衣帶(ヲ)急することを慎(ム)慎(ム)。

●小品方(ニ)、脱肛を治(スル)、驗(ア
 ル)方 藕黃二兩「猪ノ膏三合 凡(ソ)二物、搗(キ)合(セ)て和(シ)て「以」肛の上に傳(テ)傳
 ク」蜜(ニ)迫メ内ル「蜜」(シ)「之」。「再(ヒ)三(タヒ)に過(キ)不(シ)て使(チ)愈(ユ)」

又方(ニ)女萎一升を取(リ)て火に焼(キ)て烟を以て肛を勳(フ)勳(フ)即(チ)愈(ユ)「葛氏(カ)
 方(ニ)卒に大(一)便するに脱肛(ツル)を治(スル)方 頂上の廻髪の中を灸(セヨ)。百壯。「●又方(ニ)
 猪(ノ)膏に、藕黃を和(テ)て抑(内)内(空)抑(シ)以(モ)て之(ニ)之(空)粉(ク、亦佳(シ))」

●又方(ニ)「石灰を熬(リ)て熱(カラ)令(メ)て故(キ)綿(帛)裏(ミ)之」て其(ノ)上(ニ)坐(ル)。
 冷(エ)は又易(ヘヨ)「之」。并(セ)て豆ノ醬に「漬(シ)て酒を合(セ)て塗(レ)之」

●又方(ニ)
 若(シ)腸、肛出(ツル)に隨(ヒ)て轉(廣)轉(廣)入(ル)可(カラ)不(ル)「者 生
 (シキ) 桔樓(カスガ)を搗(キ)て汁を取(リ)て温(メ)て猪(ノ)膏を以て中に内(レ)て手洗(ヒ)て按(一
 「抑(スル)に隨(ヒ)て自(ラ)縮(リ)入(ル)ことを得(セ)也」 又方(ニ)石灰を熬(リ)て熱(カ
 ラ)令(メ)て布(ニ)裏(ミ)て以「以」熨(セ)之」。

按(ス)に隨(ヒ)て入(ラ)令(メ)ヨ 又方
 (ニ)鐵一精を以て粉(ケヨ)「之」

●千金方(ニ)肛漏出(スル)を「治(スル)、壁土の散方 故(キ)
 屋(ノ)東(ノ)壁の土一升(碎(ケ)自(一)茨三挺、長(サ)一尺二寸。二味土を搗(キ)て散(ニ)散
 (シ)爲(シ)て肛(ノ)頭(ノ)出(テタル)「處に粉(テ)粉(ク)自(一)茨を取(リ)て炙(リ)暖(メ)て

更逆に熨【^ナ熨ス】之」
 ●又云（ク）麻履ノ底を灸（リ）て案入（ルル）方、「故ク敗レタル麻履一
 底一枚、蟹ノ頭一枚、ニ味、蟹（ノ）頭を焼（キ）て【^ナ焼（キ）ニ】蟹（ノ）頭を【^ナ搗（キ）て】散に爲（シ）
 て肛門（ノ）滯出の頭に付（ケ）て履（ノ）底を將（チ）て案（シ）入（レ）ば即（チ）出（テ）不【^ナ矣】
 「●又云（ク）脱肛年を歴（ル）トモ愈（エ）不（ル）を治（スル）方、死（ニタル）蟹（ノ）頭一枚焼（キ）
 て烟施（サ）令（メ）て「治（キ）て屑に【^ナ屑を】作（シ）て【^ナ以（リ）肛ノ上に傅（ケ）て【^ナ傅ク】進（メ）
 て手を以て按（セ）【^ナ之】」（今案（スルニ）本草拾遺（ヲ）檢（シテ）云（ク）似（タル）を以て藥と爲（ス）
 者有（リ）。蝸牛、蟹（ノ）頭、脱肛に皆焼（キ）末（キ）て傅（ケ）は【^ナ之】自（ラ）縮ル。此（レ）
 即（チ）類を以（テ）藥と爲（ス）【^ナ也】」又云（ク）龜一尾を灸（セヨ）。立（チ）トコロニ愈（エ）。即（チ）
 後窮の「骨（ナリ）【^ナ也】」●又云（ク）冷利を積（ミ）て脱肛（ツル）を治（スル）方 枳實一枚、「石（ノ）
 上に摩りて滑澤（ナラ）令（メ）て鑽（テ）把（ヲ）安（テ）蜜塗（リ）て微シ煖（カナラ）令（メ）て熨（セ）
 【^ナ之】。冷（エ）ハ 更（カ）易（カ）【^ナ易フ】之」又方（ニ）鐵精【^ナ鐵一精】を上に粉（テ）粉【^ナ粉ク】内（ニ）入（ラ）
 令（メ）ば、即（チ）愈（ユ）又云（ク）寒（シ）脱肛（ヲ）病（ム）方 齊（ノ）中を灸（セヨ）。
 年に隨（ヒ）て壯（セヨ）又云（ク）脱肛（ツル）を治（スル）方「菴石四兩 桂一尺 猬（ノ）皮一
 枚（炙（リ）テ）黄（ナラ）令（メヨ）合（セ）搗（キ）て下（シ）篩（ヒ）て服（セヨ）。【^ナ方寸（ノ）ノ）ヒ
 日（ニ）一（タヒ）。十（タヒ）服（セハ）即（チ）縮（ル）。范汪（カ）方（ニ）脱肛（ツル）を治（スル）
 方「生（シキ）鐵三斤を水一斗を以て煮て五升を取（リ）て鐵を出（タシ）て汁を以て上を洗（ヘ）。日（ニ）
 三（タヒ）【^ナ・警門方（ニ）大腸ノ寒（エ）て【^ナ則】、肛門洞一竅（シ）、^{大腸及作瘻作漏切者此小瘻也又餘則穴針刺之也此水不} 出（スル）を療（スル）方

蟹(ノ)頭一「枚」(燒(キ)て)烟施(サ)令メシヨ令(メ)之「鐵精一兩・橋(キ)筋(ヒ)て散に」散イ散イ」
 烏(シ)て上に粉(ケ)て遍(カラ)令(メ)ヨ ●又方(ニ)破(レ)タル「麻履ノ底一枚を取(リ)て
 炙(リ)て微(シ)熬(カラ)令(メ)て履(ノ)底を以て肛を按(サ)は、入(リ)て即(チ)更に出(テ)不
 穀道ゴクドウ 癢カユリ痛(キ)を治(スル)、方第十

●病源論(ニ)云(ク)、穀道の癢(ルトイフ)は「者」「者」胃の弱ク、腸の虚(シクシ)て「則」、蟻一虫
 の下(リ)て「穀道を侵(ス)に由レリ。胃の弱ク、腸の虚(シキニ)由(リ)て「則」、蟻一虫の下(リ)
 て穀道を侵(ス)ナリ。重(キ)者は「於」肛一門を食(ヒ)、輕(キ)者は但癢ル「也」 ●葛氏(カカ)

方(ニ)、下部シリの痒(リ)痛(キ)こと虫の齧(ヘル)か如(キ)を「治(スル)者。胡粉、水一銀、棗ノ
 膏を以て和(テ)調(ヘ)て綿(ニ)裏(ミ)て之を導(レ)ヨ ●又方(ニ)杏(ノ)人熬(リ)て黒
 (マ)令(メ)て搗(キ)取(リ)て膏を(モ)て之を「塗(レ) ●又方(ニ)高(キ)鼻(ノ)蟻娘アキメシ
 蟻娘アキメシ燒(キ)末(キ)て綿(ニ)裏(ミ)て孔(ノ)中に内(レ)ヨ。當に大(イ)に「蟻アキメシ蟻アキメシ」(シ)シ」
 て虫、出(ツ)「蠶」(シ) ●又方(ニ)桃(ノ)葉一斛を搗(キ)て蒸(シ)「之」て小(サキ)口ノ

器ノ中に内(レ)て大(キナル)孔を上に「布(キ)て坐は虫死(ヌ) ●錄驗方(ニ)、若(シ)、下一部
 ノ痒(リ)痛(クシ)て虫の齧カフか如(キ)者。「小豆一升を好(キ)苦ク酒五升をモて豆を煮て熬(ル)
 と(キ)に出(タシ)て干(シ)て々(干)は「干(シ)」「干(シ)」「復、酒に内ル。々(酒)盡(キム)と(キ)

に「盡(キ)は」「止(メ)て止(メ)ヨ」末(キ)て酒(モ)て「酒」に「服(セヨ)」。方寸(ノ)ヒ。
 日(ニ)三(タヒ) ●徐伯(カ)方(ニ)、穀道ゴクドウ穀道ゴクドウノ忽(チ)に癢(リ)痛(ク)、「腫(レ)

起(キ)て生一突^ツ【突キ】出(テム)と欲るを治(スル)方、槐(ノ)白皮六兩、甘草三兩、凡(ソ)

【三物、豆(ノ)汁を以て煮て故(キ)帛^キを漬(シ)て薄^ツ【薄ク】之】。熱(ク)は即(チ)易(ヘヨ)

●新録單「方(ニ)穀道(ノ)中に、虫有(リ)て痒^{カユ}ルを治(スル)者、艾三分水五升を(モ)て煮て二分

玄^ニ升^ニ取(リ)て【二(タヒ)服(セヨ)】。又方(ニ)諸^本肉^痛ヲ灸(リ)て香を令て逆^レ煎^セ。

【煎(シ)】虫皆出(ツ) ●棟要方(ニ)卒^暴に冷(エ)て下部ノ疹^一悶(スル)【疹^一悶(スル)

方。燔^{カク}を燒(キ)て熱(カラ)令(メ)て大(キナル)醋^スを浚(シ)【之】て【之^之浚(シ)て】三^一

重(ノ)布ヲ覆(ヒ)て上に坐^トヨ。差(ユル)を取(リ)て止(メヨ)【千金方同(シ)之】進^一●集

驗方(ニ)虫(ノ)下^一部を食するを治(スル)方、胡粉、雄黄、分等(シ)て末(キ)て穀道ノ中に着

(ケヨ)

●穀一^道ノ赤(ク)痛(キ)を治(スル)方第十一

●集驗方(ニ)穀^一道^ノ赤(ク)痛(キ)を治(スル)方、菘^ネ糸^シ(ノ)子熬(リ)て黄(ミ)黑(マ)令(メ)

て和(ツル)に、【鷄一子一黄を以て【以】塗^レ【塗ル】之】。日(ニ)三(タヒ) ●又方(ニ)杏(ノ)

人を取(リ)て熬(リ)て黄(マ)令(メ)て搗(キ)て脂^ニ【脂^を】作(シ)て【塗(レ)】之】

●穀一^道に瘡^を生(ス)を治(スル)方第十二

●病源論(ニ)云(ク)穀道ハ肛一門大腸(ノ)【之】候ナリ。大腸虚(シク)熱(クシ)て其(ノ)氣衝(リ)

【熱(クシ)て肛一門に【肛門^を】結(フ)。故に瘡^を生(サ)令(ム)】 ●葛氏(カ)方(ニ)下^部に卒

に創^成有(ル)を治(スル)方、蟬^ス蟻^スを【搗(キ)て塗(レ)】之】 又方(ニ)豉^を煮て【以】漬(セ)【之】

●又方(ニ)豆(ノ)汁以を(モ)て『豆(ノ)汁を以て』墨を「摩(リ)て導(レ)ヨ」之」 ●范汪(カ)方(ニ)、下(一)部に卒に創有(リ)て若(シ)轉キョウ深ナルを治(スル)者「烏カ梅五十枚、塩五合。水七升を(モ)て三升を『三升』取(リ)て分(ケ)て三(タヒ)服(セヨ)」「又方(ニ)常に舉シヨウ(ノ)皮を煮て飲(メ)之」(『已上葛氏(カ)方同(シ)之』)

●濕シツ 26 左治(スル)、方第十三

●病源論(ニ)云(ク)、濕シツ 濕シツ (ノ)病(トイフ)は脾、胃、虛弱ナルに由(リ)て水濕スイシツ 爲(シ)水濕スイシツ 爲(シ)乘(ラ)所て『乘(ル)所ナリ』腹(ノ)内(ノ)虫動(キ)て侵(シ)食(ヒ)て蜜ミツ 成(ス)也」

●錄驗方(ニ)濕シツ 濕シツ (シ)『濕シツ 濕シツ (シ)で』下(一)部に瘡を生(ス)を治(スル)方、胡粉、水銀、黄蘗、

凡(ソ)三物治(キ)て末(キ)て粉コを等ナ分(シ)て合(セ)研スりて水「銀を散(シ)盡(シ)て」以(レ)創(ノ)上に傳(ケ)ヨ ●又方(ニ)常に、猪(ノ)脬ハシラツタ 脬ハシラツタ 腸チウ を炙(リ)て之を食(セヨ)佳(シ)

「又方(ニ)溺ハクを温(メ)て熬(カラ)令(メ)て小(キ)煖石を内(レ)て「以(レ)洗(ヘ)之」 ●集驗方(ニ)蠶サ 虫(ヲ)治(スル)杏人湯(ノ)方。杏(ノ)人五十枚、苦酒ス 苦酒ス 三升、塩一合ツ 煮て

五合を取(リ)て「頓(クニ)服(セヨ)之」 ●令李(カ)方(ニ)蠶サ 虫、及(ヒ)蟻アリ 虫の下部を侵キ食するを治(スル)枯カ 樓カシ 散(ノ)方 枯カ 樓カシ 根四兩 亭テイ 陸リク (ノ)子四兩、凡(ソ)二物治(合(セ)て下(一)徒タ (ヒ)て「艾アハ (ノ)汁を以て浸(シ)て綿(ニ)裹(ミ)て下(一)部ノ中(ニ)内(レ)て日(ニ)三

(タヒ)易(ヘ)ヨ ●葛氏(カ)方(ニ)穀道ノ「蠶サ 創ノ赤(ク)痛(ク)、又痒(ル)を治(スル)方。杏(ノ)人熬(リ)て黑(マ)令(メ)て搗(キ)て綿を以て裹(ミ)て導(レ)ヨ」之」「又方(ニ)槐

(ノ)皮、桃(ノ)皮、練ノ子、合(セ)末(キ)て猪(ノ)膏に和(テ)て導(レヨ)。
 ●又方(三) 芫^{ネシヤ}糸(ノ)「子熬(リ)て黄(ミ)黒(マ)令(メ)て鷄子黄に和(テ)て塗(リ)導(レヨ)之」
 方(ニ)棗(ノ)膏を以て「水銀に和(テ)て相(ヒ)得令(メ)て長(サ)三尺ナル綿に裹(ミ)て宿(ル)ヒ(キ)に下部に導(レヨ)之」
 ●又方(三) 胡粉、雄黄、分等(シ)て末(キ)て下部(ノ)内に導(レヨ)。
 ●范汪(カ)方(ニ)、穀道(ノ)「蠶瘡ノ」²⁸「赤(ク)痛(ク)、又痒(ル)を治(スル)方。組(ノ)腸を搗イテ綿に塗(テ)指の如(ク)シ」以之を導(レヨ)。虫出(ツ)

●疳濕を治(スル)、方第十四

●病源論(ニ)云(ク)、人甘味を嗜(ミ)て多(ク)すること有(ル)ときは、「而」腸胃の間を動(シ)て諸(ノ)虫「侵(サ)令(ムル)ことを致(シ)、府藏を食(フ)。此(レ)、猶是ノ蠶(ナリ)也」。但虫甘に因(リ)而動(ク)。故に名(ツケ)「之」て「甘と爲(ス)也」。其(ノ)初(メ)ノ患(フル)「之」状、手足焼(クルカ)コトクに疼(キ)て腰(脊)力無(ク)、力無(シ)夜卧(シ)て煩(躁)シ、^{全生}「昏(シ)ヒ(シ)て喜(ミテ)忘(シ)シ、^{痛忍不欲言}嘔(シ)て眼澁、夜夢顛倒(シ)、飲食味無(ク)シ」て「而」顔(色)を失(ヒ)、「失(フ)睡を喜(ム)て起(クル)ときは「則」頭眩(キ)、體重(ク)、^肥「腫(キ)、^酸「疼(ク)酸(疼(シ))其(レ)上(リ)て五藏を食(フトキハ)、「則」心(ノ)内、懊(惱)す。出(テ)て咽(喉)、及(ヒ)齒斷(ク)齒(斷)を食(フ)ときは、皆、瘡を生(シ)て黒(キ)血を出(タシ)て齒(ノ)色紫(黒)ナリ。」「紫黒(ニシ)て下(リ)て腸(膈)を食(フ)ときは、瘡爛を生(シ)て開(ク)。胃(ノ)等「氣虛(シ)ク」逆(ヘ)は「則」變(シ)て嘔(噦)ス」嘔(噦)ス」。急(ナル)者は數日アて便(チ)死(ヌ)。

250

亦、緩（キ）者は止（ム）こと有（リ）【緩有（ラ）は「者」止（ム）】。沉「マ、嘿々」と（シ）て支節^{ヒツ}疼^{ヒツ}キ重（ク）、【重シ】。食一飲減少（シ）て面の顔色无（シ）　　●又云（ク）五「甘、一は是（レ）、白甘、人（ヲ）令て皮一膚、枯一燥^カキ面の顔色を失（ハ）【令^命（ム）】。ニは是（レ）、赤甘、内（リ）て「五藏を食（フ）ときは、人を令て頭髮^イ、頭髪^イを、焦^カレ枯（レ）【令^命（ム）】。三は是（レ）、燒^カ甘、人（ノ）脊^セノ脊^セ（フ）を食（ヒ）て「五藏に遊^ユ解行（スル）ときは、體重ク浮腫アリ^{*}浮腫ス】。四（ハ）是（レ）甘鬩。人を令て下部、疼一癢（リ）、腰脊、變「急（ナラ）【令^命（ム）】。五（ハ）是（レ）黒甘、人（ノ）五藏を食（フ）ときは、多（ク）黒（キ）血を下す。數日（アリ）て即（チ）死（ヌ）　　●又云（ク）面「青（ク）、頰赤（ク）、眼に精一光无（クシ）て【无（ク）】唇口焦（レ）燥キ、腹脹（レ）て塊（ノ）コトキナル有（リ）て日々に瘦（セ）損（ハ）は【者】是（レ）、甘の人（ノ）五藏を食（フ）ナリ。死に至（ル）マテ、覺（エ）不　　●又云（ク）五甘、緩（ク）は【者】則【變（シ）て五蒸と「成（ル）】　　●千金方（三）云（ク）論（ニ）曰（ク）凡（ソ）疝一濕ノ【之】病を爲（ス）ことは、皆暑月に多く、肥一濃油膩（ヲ）食して【食シ】冷を取（リ）て睡一眠するに由（リ）て得（ル）所ナリ【之】。礼（ニ）曰（ク）、君子ハ盛暑（ノ）【之】月、「滋^コキ味^イを薄^クシ、【薄^クス】肥一濃、煮一麩^クを食（スル）こと无（カレ）。【无（ク）】此（レ）人に利（アラ）不（ル）【人^イ利（セ）不（ル）】所^{*}以（ナリ）【也】。養一生ノ者、宜（シク）深ク戒ム【宜^命（シ）】【之】　　●又云（ク）疝一濕^{*}アテ下の黒（ミ）、醫の治（スル）こと能（ハ）不（シ）て死（ナム）と垂^スるを治（スル）方。麝香三分、丁「子香三分、甘草三分、犀角三分、四味並^細カニ末（キ）【之】て合（セ）和（シ）て「別に、塩三合、椒^ハ三合、豉^クニ合を以て【以「塩三合、椒^ハ三合、豉^クニ合を、

255

260

水二升を以て煮て一升を取（リ）て滓を去（ケ）て「末（キタル）散を内（レ）て和（セ）て分（ケ）て二服に作（シ）、作（セ）」大（キナル）孔に灌（ケ）。且に一（タヒ）灌（ケ）。酉（ノ）時に一（タヒ）灌（ケ）。又「云（ク）生（シキ）冷（エタル）酢（キ）滑（カナルモノ）を忌（メ）。但、是に、油、膩（ヤカナルモノ）、醬、乳、酪、廿日之を慎（メ）。大々（イニ）佳（シ）。又云（ク）凡（ソ）疔には一切皆忌（メ）。唯シ、白飯、唯白（忌）飯、塩、豉、茵蔯、苦苣、蕪、禁する限に在（ラ）

不 ●鉄驗方（ニ）甘濕を治（スル）方。「治（スル）方」青 相二兩、苦參二兩、雄黃二兩、石留黃、石留黃 二兩、狼牙三兩、蕪夷二兩、雷丸二兩、梨蘆一兩、凡（ソ）八物、橋、篩（ヒ）て、鳩（キ）で篩（ヒ）て取（リ）て杏（ノ）人の大（キサ）如（シ）て大（キサ）の如（クシ）て下部の中に内（イレ）也。「醫門方（ニ）、疔蠱を療（スル）、所（在）を問（フ）こと無（キ）、方 死（ニタル）

蝦蟇を取（リ）て焼（キ）て「灰に作（シ）て好（キ）醋を以て和（テ）て瘡（ノ）上に塗（レ）。即（チ）愈（ユ）。 ●救急單驗方（ニ）、急（一）蛇を療（スル）方。無（一）食（一）子末（キ）て腹（ノ）内患（フ）者には下部に「下部を治（スル）吹（ケ）。立（チ）トコロニ」驗（アリ）。「又方（ニ）白（キ）馬（ノ）尿一升を灌（ケ）。虫惣て出（ツ）。驗（アリ）。又方（ニ）文蛤を焼（キ）タル灰を「灰」取（リ）て臈「月（ノ）猪（ノ）脂に和（テ）て塗（レ）又方（ニ）練（リタル）熨（石）、桂（心）、徐（長）卿（徐（一）長（一）卿（一）各、等（一分）（シ）て末（キ）て塗（レ）」「驗（アリ）

●諸（ノ）疔を治（スル）、方第十五

●病源論（ニ）云（ク）、諸（ノ）疔と（イフ）は「者」謂（ユル）牡（一）疔牝（一）疔脉（一）疔腸（一）疔血（一）疔（ナリ）

280

「也」。疔瘡(ハ)肛(ノ)邊に、穴を生(シ)て鼠の乳如(シ)て「如」。時々、膿(ハ)血を出(タス)。
 疔瘡ハ肛ノ邊腫(レ)て創(ハ)創(ハ)を「生(シ)て」而血出(ツ)。脉瘡は肛(ノ)邊に、創を生(シ)て癢(リ)
 痛シ。腸(ハ)瘡は肛(ノ)邊、腫(ハ)腫(ハ)酒(ハ)核(ハ)ムテ痛(シ)。寒に發(リ)て「發(リ)て」寒に(シ)て「熱(キ)
 血出(ツ)。血瘡は便に因(リ)而清(ハ)血隨(ヒ)て出(ツ)。又酒(ハ)瘡有(リ)。「有(リ)」又氣瘡は大便
 難(シ)に(シ)而血出(テ)、肛、亦、外に「出(ツ)。良久(シクシ)て入(リ)肯(カ)不(シ)諸(ノ)瘡は皆、傷(ハ)
 風(シ)、房(ハ)室(シ)、慎(マ)不(シ)、醉(ヒ)飽(キ)て陰(ハ)陽(ハ)合(セ)て勞(ハ)致(シ)て血氣(ハ)擾(ハ)
 由(リ)而「血氣を擾(シ)テ」而「經(ハ)脉流(ハ)溢(シ)て腸(ノ)間に滲(ハ)漏(シ)て「衝(リ)下(ハ)部に
 發(ル)。瘡久(シク)、差(エ)不(シ)、變(シ)て癢(ハ)爲(ル)也」。●養生方(ニ)云(ク)、大「便を忍
 (ヒ)て出(タサ)不(シ)、不(シ)久(シクシ)て氣瘡を作(ス)。●龍門方(ニ)云(ク)、(一三)
 曰(ク)、腫(レ)て息肉を生(ス)。「生(シ)て」狀、棗の「核(ハ)如(クシ)て「如(シ)」。孔に、膿(ハ)
 血有(ル)を、名(ツケ)て雄(ハ)瘡(ト)曰(フ)。二(ニ)曰(ク)、孔ノ傍に、創有(リ)て内引(キ)、
 孔痛(クシ)て膿(ハ)血を「出(タシ)て虫(ハ)行(ク)か如(キ)を、」如(シ)」。名(ツケ)て雌瘡と曰
 (フ)。三(ニ)曰(ク)孔に膿(ハ)アテ虫(ハ)行(ク)か如(キ)を、名(ツケ)て脉(ハ)瘡(ト)曰(フ)。四
 (ニ)曰(ク)大行(シ)て肛(ハ)出(ツ)ルコト數(ハ)寸(ハ)ナルを、名(ツケ)て腸瘡と曰(フ)。五(ニ)曰(ク)大
 行の後血(アリ)て人を令(テ)色(ハ)少(カ)カラ「令(メ)懈(ハ)墮(シ)て食を欲(セ)不(ル)ヲ、名(ツケ)
 て氣瘡と曰(フ)。皆、猪肉を食(シ)、酒を欲(シ)、寒を「傷(ヒ)て」傷(ハ)寒(シ)、水(ハ)飲(ム)
 コト過(ハ)多(ナリ)て得(ル)所(ナリ)也」。●瘡病(ノ)禁忌 ●千金「方(ニ)云(ク)、寒食、猪

285

290

(ノ) 夾、生(シキ)魚菜、房内を禁(セヨ)。病差(エ)「之」て後百日アリて「百日に」房内を通セ「令(メヨ)」。又云(ク)通(シ)て「薯菜を忌(メ)」。・様要方(ニ)云(ク)、「肥(肉生)魚を禁(シ)、食(ス)可(キ)、物。・千金方(ニ)云(ク)干(タル)白(夾)を食(スル)こと得(ト)」。・葛氏(カ)方(ニ)云(ク)、「鱮魚ノ鱠を作(シ)て薑(ハ)薑(ハ)テ之を食(セヨ)。多少、人(ニ)任(セ)、食(セヨ)」。[經(ニ)云(ク)「樞ノ實(五痔に主(ス))」鯛(痔虫(ヲ)去(クルニ)主(ス))「蠶魚(五痔に主(ス))」海鼠(痔(ヲ)療(シ)驗(ヲ)爲(ス))「竹笋(五痔(ニ)主(ス))」。・本草(ニ)云(ク)「羊蹄(痔(ニ)主(ス))」。・拾遺(ニ)云(ク)「鯽ノ鱠は赤(白)ノ利、及(ヒ)五痔に「主(ス)」。・療痔病經(ニ)云(ク)佛、阿難陀に告(ケ)タマハク、「汝、諦(聽(ス)可(シ))」可(ク)此(ノ)療痔病經は讀誦(シ)受持(シ)て心に繫(ケ)て忘(ルル)こと勿(レ)」。亦、「於(他人を(シ)て廣(ク)爲(ニ)宣説(セヨ)」。此(ノ)諸(ノ)痔病、悉(ク)に除(キ)殄(ユル)を得(む)。所(謂)「風痔、熱痔、陰痔、三合痔、血痔、腸中痔、鼻内痔、齒痔、舌痔、耳痔、頂痔、手足痔、背(脊)痔、糞門痔(ナリ)。遍(一身支(節)に、生(ル)所(ノ)諸(ノ)痔、是(ノ)如(キ)の、痔病、受(悉(ク)に「皆、乾(キ)煇(キ)墮(キ)落(シ)、銷滅(シ)て差(ユル)こと疑無(シ)。皆、是(ノ)如(キ)ノ、神呪を習(持)す應(シ)。即(チ)呪を説(キ)て曰(ク)恒(姪)他 阿爛帝 阿蘭速 室利鞞 室里繼々々 磨羯失質三婆 跋都婆訶。・小品方(ニ)五痔散は酒容(シ)酒容(スル)を及(ヒ)勞損(シ)「傷冷(シ)て下(部(ノ)中に旁(孔)有(リ)て起(居(スル)に血、縦(横)に出(ツル)者及(ヒ)「夾有(ル)者、治(スル)方、悉(ク)に主(ス)「之」」。赤小豆四分(熬(レ)) 蜀黃耆(蜀黃一耆)二分(蜀附一子一分(炮(レ)) 夕藥(夕藥)二分(白薇一

恒(姪)他 阿爛帝 阿蘭速 室利鞞 室里繼々々 磨羯失質三婆 跋都婆訶。・小品方(ニ)五痔散は酒容(シ)酒容(スル)を及(ヒ)勞損(シ)「傷冷(シ)て下(部(ノ)中に旁(孔)有(リ)て起(居(スル)に血、縦(横)に出(ツル)者及(ヒ)「夾有(ル)者、治(スル)方、悉(ク)に主(ス)「之」」。赤小豆四分(熬(レ)) 蜀黃耆(蜀黃一耆)二分(蜀附一子一分(炮(レ)) 夕藥(夕藥)二分(白薇一

恒(姪)他 阿爛帝 阿蘭速 室利鞞 室里繼々々 磨羯失質三婆 跋都婆訶。・小品方(ニ)五痔散は酒容(シ)酒容(スル)を及(ヒ)勞損(シ)「傷冷(シ)て下(部(ノ)中に旁(孔)有(リ)て起(居(スル)に血、縦(横)に出(ツル)者及(ヒ)「夾有(ル)者、治(スル)方、悉(ク)に主(ス)「之」」。赤小豆四分(熬(レ)) 蜀黃耆(蜀黃一耆)二分(蜀附一子一分(炮(レ)) 夕藥(夕藥)二分(白薇一

310

分 黄芩ヒキ二分「桂心一分 七物ナシ末キ」て「ナシ末キ」て「下ナシ筋ヒ」て酒を以て服（セヨ）。方寸（ノ）ヒ。日（ニ）三（タヒ）。血止（マ）は、「ナシ有（リ）」。又云（ク）穀道の癢（リ）痛（キ）痔（ノ）瘡を治（スル）。槐キ皮キ膏（ノ）方。槐キ皮「五兩 練ナシ子ミ五十枚 桃（ノ）八五十枚 甘草二兩 蜜ヤマトリ歸ナシ二兩 芥ナシ小豆ナシ二合 白芷カサモ子二兩 七物吹ナシ咀（シ）て猪（ノ）膏二分を以て煎（シ）て「白芷を令（マ）令ナシ」ナシ（メ）て藥成（ル）ヒ（キ）に滓を絞ナシ去（ケ）て傳（ケヨ）「之」。日（ニ）再（ヒ）三（タヒ）良（シ）（《今案（スルニ）様要方（ニ）云（ク）、痔を療（スルニ）火（ノ）如（ク）、刀を「燒（キ）て割（レ）。行坐忍（フ）可（カラ）不ナシは、床を下（リ）て藥を着（ケ）て床に上（ラ）は即（チ）痛（キ）こと完（シ）。神（タ）効（アリ）》。千金方（ニ）云（ク）、五痔に、氣「痔有（リ）。温寒濕勞に即（チ）發（ル）。蛇ヘヒノ脫モエケ主（ス）「之」。牡痔は穴を生（ス）こと、鼠（ノ）乳の如（クシ）て在乳孔（ノ）中に在（リ）て頗（タ）、外に見（ユ）。「於ナシ」更衣に妨（ク）。鬘カメノ甲主コテ（ス）「之」。牝痔は孔（ノ）中「從、起（キ）て外腫（レ）て五六日に自（ラ）潰ツエて膿ナシ、血を出（タス）。蝟ウジ（ノ）皮主（ス）「之」。腸「痔は更衣に、挺（ケ）出（テ）て久（シク）乃（チ）縮ツマル。牡猪ノ左足（ノ）懸カマ蹄ツメノ甲主（ス）「之」。脉「痔は更衣に、清血出（ツ）。蜂ハチノ房ナシ蜂ハチノ房ナシ主（ス）「之」。藥皆下（シ）筋（ヒ）て分等（シ）て其（ノ）病に「隨（ヒ）て其（ノ）主スル藥を倍（キ）て三分に爲（シ）て且に井花水を以て服（セヨ）。半方「寸（ノ）ヒ。病甚（シク）は「者」且暮に服（セヨ）「之」。亦、四五服に至（ル）可（シ）。又云（ク）痔「下ナシ部ヨリ、濃ナシ血を出（タシ）て虫有（リ）て旁カサニ孔アナ竅ナシ孔アナ竅ナシ」を生（ス）を治（スル）方。槐（ノ）白皮ナシ一擔ナシ剉ナシ「剉ナシ」て釜（ノ）中に「内（レ）て煮て味極（メテ）出（タサ）令（メ）て令（ム）。」木（ノ）筵ホトキの中に置（キ）

315

320

て寒温を適（へ）て其（ノ）中に坐て大便セムト欲^キ。狀^ハハ^ハ狀（クシ）て虫悉（ク）出（ツ）。冷（エ）は又易（へヨ）之^レ。又云（ク）五痔（ノ）方、熊ノ「膽を塗（レ）」。塗（リ）て差（ユル）を取（リ）て乃（チ）止（メヨ）。神（タ）良（シ）。一切の方、皆、此（ノ）方に及（ハ）不^レ。又方（ニ）桃ノ「根を煮て洗フ之」。僧深方（ニ）、痔を治（スル）、神方^ニ。槐^ノ根^ヲノ耳^ヲを散に^テ散^ル。烏（シ）て服（セヨ）。方寸（ノ）匕。亦、穀道（ノ）中に粉^ヲ粉^ク。甚（タ）良（シ）。録驗方（ニ）、痔を治（スル）方白、蜜塗（レ）之。孔有（ラ）は、以て孔（ノ）中に内^レ内^ル。張（温）表上（リ）、蜀^ヲ使^テトシ得（ル）所（ナリ）也。又方（ニ）槐（ノ）根を「煮て洗（ヘ）之」。香婆（カ）方（ニ）、人ノ下脚^ノ下^ノ部^ノに熱（風）虚（結）（シ）て痔を成（シ）て「久（シク）、差（エ）不（シ）て人を令て血下（サ）令^テ食（メ）て面^ニ黄^キ瘰^テ力無（キ）を治（スル）方。白（キ）錫糖^ヲ錫^糖糖^ヲ但少々「空腹に食（セヨ）。食（セ）は」差（エ）は乃（チ）止（メヨ）。若（シ）、是（レ）、秋月（ナラ）は彌宜（シ）。●集驗方（ニ）、痔を治（スル）方。生（シキ）槐^ノ皮^十兩^上（ノ）皮^ヲ削^リ去^ケて一物^ヲ煎（カ）ニ^ニ搗（キ）て丸（カ）シて彈丸^ノ如（ク）シて綿^ヲ裏（ミ）之^レて穀^道の中に「内^レ」。●様要方（ニ）³³方^ニ痔を療（スル）、神方。鱧魚^三頭、腹^ヲ破（リ）て腸^ヲ取（リ）て炙（リ）て少（シ）許、少（シ）許^ヲを^レ。令（メ）て綿^ヲ絮^ヲ綿^ヲ絮^ヲを以て裏（ミ）之^レて穀道（ノ）中に内（レヨ）。²「一飯ノ項^ノ一飯ノ項^ノに虫^當（ニ）出（テ）て魚ノ腸^ヲを食^フ當^ニ（シ）。更^易（へ）て新（シキ）香^ヲを着（レヨ）。三枚^ヲ盡（シ）て「盡^セハ」即（チ）「差（エ）」。●葛氏（カ）方（ニ）、腸痔^ヲを患（へ）て大便^毎、恒に血^ヲ去（ル）治（スル）方。常（ニ）蒲^一黃^ヲを服（セヨ）。方寸（ノ）匕。日（ニ）三（タ）ヒ。

差(ユル)を瀕(チ)て止(メヨ) ●醫門方(三)、五痔の血(ヲ)下(ス)こと、止(マ)「不(ル)を療(スル)、冷(熱を問(フ)こと無(キ)「者」「止(マ)不(シ)「冷(熱を問(フ)こと無(キ)者を療(スル)」「方 黄耆十二分、猪(ノ)後(ノ)懸蹄十四「枚、(炙(レ))「髮(ノ)灰、青(キ)布(ノ)灰、緋(キ)布、灰、(各二分)「葉(カサエト)「葉(カサエト)本」五分、大(ノ)黄十二分、猪(ノ)皮八分、(炙(レ))「露(イロハナ)蜂(ノ)房」八分、(炙(レ))「蜜(ハチ)丸(シ)て空(ノ)腹(ニ)世丸(ヲ)を飲(セヨ)。「飲(セヨ)送(スル)」「日(ニ)ニ(タヒ)加(ヘ)て知(ル)に至(ル)を、度(ト)爲(セ)甚(タ)効(アリ) ●救急單驗「方(ニ)、五痔を療(スル)方 五月五日、蒼(ナモミ)耳(ノ)莖(ヲ)葉(ヲ)取(リ)て陰(乾(シ)て末(キ)て水(ヲ)以(テ)「服(セヨ)」。二方寸(ノ)匕(命標)日(ニ)三(タヒ) ●又方(ニ)「牛(ウシ)角(ツツ)「牛(ウシ)角(ツツ)「燒(キ)て末(キ)て酒(ニ)和(テ)て服(セヨ)方寸(ノ)匕(ニ)日(ニ)三(タヒ)秘(カニ)驗(アリ) ●傳信方(ニ)「野(ヤ)鷄(ヲ)を療(スル)方「療(野鷄)の方」 右槐枝湯(ヲ)以(テ)「痔(ノ)上(ヲ)洗(ヒ)便(チ)已(リ)て艾(モ)て上(ヲ)灸(セヨ)」。七壯。知(ユル)を以(テ)度(ト)爲(セ)王(一)及(一)亥(一)安(一)撫(一)に遷(リ)て官(ニ)「到(ル)と(キ)に、騾(吐木反)馬(ニ)乘(リ)て駱(谷)に入(ル)數(日)下(リ)而(宿(ル)と(キ)に痔(ノ)疾(有(リ)其(ノ)狀(胡瓜)の如(ク)シ)て「於(ノ)腸(ヲ)貫(ク)熱(キ)こと火(ノ)如(シ)一驛(ニ)到(リ)て腰(イ)臥(シ)て計(無(シ))主(一)郵(ナル)「者(有(リ)て云(ク)郎(一)中(此(ノ)病、某(ノ)曾(患)へ來(レリ)瀕(ラク)灸(シ)て即(チ)差(ユ)「瀕(シ)所(一)使(ニ)命(シ)て「槐(ノ)湯(ヲ)爲(リ)て痔(ノ)上(ヲ)洗(ヒ)て洗(フ)便(チ)灸(ス)「之」三四壯(ニ)到(リ)て先(ツ)血(ヲ)出(タシ)て後(ニ)乃(チ)穢(有(リ)て腹(ノ)中(ニ)入(リ)て大(轉)する(ニ)因(リ)て先(ツ)血(ヲ)出(タシ)て後(ニ)乃(チ)穢(有(リ)て

有(リ)。「』一時出(ツ)。楚一「痛瀉(痛) (シ)て「楚一痛(ス)。瀉(シ)て」後に遂に、胡一瓜ノ所往(ヲ)失(ヒ)て驟一馬に登(リ)而馳(ス)。

●九虫を治(スル)、方第十六

●病源論(二)云(ク)、九虫(トイフ)は「蒼」一は伏虫と曰(フ)。長(サ)四分。二(ハ)蛔一虫と曰(フ)長(サ)一「尺。三(ハ)白虫と曰(フ)長(サ)一寸。四(ハ)肉虫(ト)曰(フ)狀、爛レタル李の如(シ)。五(ハ)肺痿虫と曰(フ)狀、「蚕の如(シ)。六(ハ)胃(虫)と曰(フ)狀、蝦(蟻)一蟻」の如(シ)。七(ハ)弱一虫と曰(フ)狀、瓜ノ瓣(ハ)の如(シ)。八(ハ)赤虫と曰(フ)狀、生(シキ)肉の如(シ)。九(ハ)蟻虫と曰(フ)至(リ)て細微(ニシ)て形、菜ノ虫の如(シ)。此(ノ)諸(ノ)虫、

「腸胃(ノ)之」間に依(リ)て「依(ル)」。若(シ)、府藏(ノ)氣實(ル)ときは「則」、害を爲(サ)不(ス)。若

(シ)、虚(シキ)ときは「虚(シク)は「則」、能(ク)「侵シ食ム。其(ノ)虫(ノ)之」動(ク)に隨(ヒ)而變(シ)て諸(ノ)病を成(ス)」。●承租方(三)云(ク)、九虫丸「九虫丸」百「虫を治(スル)方」牙子、貫衆、蜀法漆、蜀漆、蕪夷、雷一丸、橘(ノ)皮、凡(ソ)六物、分等(シ)て搗(キ)篩(ヒ)て蜜丸(シ)て大豆の如(ク)シて漿(モ)て服(セヨ)。廿丸。【廿丸】日(ニ)ニ(タヒ)。「虫を下(サ)令(ム)」。●又云(ク)九虫散。藿蘆、藿蘆、二兩(炙(レ)シ)貫衆一兩「干漆二兩(炙(レ)シ)狼

牙一兩 凡(ソ)四物下(シ)篩(ヒ)て羊(ノ)矢(ノ)糞、汁を以て一合を「服(セヨ)」。服(スル)シ」と

日(ニ)三ヒ

●三虫を治(スル)方第十七

365 ●病源論(ニ)云(ク)、三虫(トイフ)は「者」長虫、赤虫、燒虫(ナリ)「也」。猶九虫「虫(ノ)之」數(ナ

リ)「也」。長虫は蛔虫(ナリ)「也」。長(サ)一尺。動(カ)は「則」吐(キ)て清一水を出(タス)。清一

水を吐(ク)出(テ)心「痛(クシ)て實(ク)ときは「之」則」死(ヌ)」。赤虫は狀、生(シキ)肉

の如(シ)動(カ)は「則」腸鳴(ル)燒虫は「至(リ)て細一微(ナリ)」。形、菜(ノ)虫の如(シ)「也」。

胴腸ハラヲ「胸一腸」(ノ)間に居て多(ク)は「則」痔を爲(ス)。「劇(シク)は「則」癩六類癩六類を爲(ス)。

人に因(リ)て瘡處、瘡處(アリ)て「以」諸(ノ)癰於瘡反、疽七余反、癰、瘰、癧昔漏、疔古力反、疔六介、斷虫ハツク「斷虫」を生(ス)。

爲(サ)不ヒイフ所無(シ) ●様要方(ニ)三虫を治(スル)方「茱萸ノ東行の根ノ大(キナル)者長

(サ)一尺を取(リ)て「大(キナル)者」取(ル)長(サ)一尺「麻(ノ)子八升を鳩(キ)之」て

細(カク)「茱萸を削(リ)て八升(ノ)酒を以て合ナ漬(シ)て一宿(シ)て布(モ)て滓を絞シ去(ケ)

て宿(ル)と(キ)に食(スル)こと勿(クシ)て「勿(レ)」。且に「起(キ)て盡(ク)之を飲(マ)

は「之を飲(ミ)盡(サ)は」便(チ)虫を下(ス)。ミ虫、或は完ヌクク(シ)て出(ツ)或(ハ)以て半分

(ハ)爛(レ)或(ハ)黄(ナル)汁ナアルは「者」是(レ)虫ノ爛爛レタルナリ「也」。藥を作(ス)時道

フコト莫(レ)「之」虫下(ラ)不ト ●葛氏(カ)方(ニ)三虫を治(スル)方。桃(ノ)葉を搗(キ)

て汁を絞(リ)取(リ)て一升を飲(メ)

●寸白を治(スル)方第十八

●病源論(ニ)云(ク)寸一白(トイフ)は「者」九虫の内(ノ)「之」一虫是(レ)ナリ「也」。長(サ)一寸

(ニシ)而「色白(クシ)て色白(ク)」形小(サク)扁(シ)。府藏の虚弱に因(リ)而能(ク)發

動す。或（ハ）云（ク）、「白一酒を飲（ミ）て桑（ノ）樹（ノ）枝を以て牛（ノ）肉を貫（キ）て炙（リ）て食シ、并（セ）て生（シキ）乗（成）ス所（ナリ）」。又「云（ク）生（シキ）魚（ヲ）食（シ）て後即（チ）、乳一酪を飲（マ）ハ、亦、生（サ）令（ム）之」。又云（ク）此（ノ）虫長「長（サ）一尺

ニナレハ「則」人を令て死（ナ）令「令」之（ム）之。葛氏（カ）方（ニ）、寸白を治（スル）方 多（ク）「種ノ子を食（スル）、亦佳（シ）」。又方（ニ）猪（ノ）血を煮て宿（ル）と（キ）に食（セ）不（シ）て明

旦に、飽クマテ之を食（セヨ）。又云（ク）濃（ク）猪「猪」櫛「櫛」柳を煮て三升を飲（メ）。虫「則」、

出（テ）盡（ク）。又云（ク）虻虫（ヲ）治（スル）方、龍膽（ノ）根を用（斗）て多一少、意に任（セ）

て濃（カラ）令（メ）て滓を去（ケ）て宿（ル）と（キ）に「宿（リ）て」食（セ）不（シ）て清朝に一ニ升（ヲ）服（セヨ）。二（タヒニ）過（キ）不（レ）又方（ニ）生（シキ）艾を搗（キ）て汁を絞（リ）

取（リ）て即斗宿（ル）と（キ）に食（セ）不（シ）て朝に「一升を飲（メ）。常に虻を下（ス）。集驗

方（ニ）、寸白を治（スル）方。茱萸（ノ）根を取（リ）て土を洗「去（ケ）て切（リ）て一升。漬（シ）

て一宿（シ）て平一旦に分（ケ）て再一服（セヨ）。樹は北ノ陰の地ノ「根を取（レ）。又方（ニ）桑（ノ）

根（ノ）白皮切（レル）三升水七升を以て煮て二升を取（リ）て宿（ル）と（キ）に「宿（リ）て」食

（スルコト）無（クシ）て一（タ）ヒに頓一服（セヨ）之。香菱（カ）方（ニ）云（ク）、狼一牙丸寸

白を治（スル）方。「狼牙四分 蕪夷四分 白欬四分 右脊四分 干漆四分 右五味搗一篩（ヒ）て搗

（キ）て篩（ヒ）て完（キ）豆の如（クシ）て十丸（ヲ）服（セヨ）。醫門「方（ニ）、寸白を療（ス

ル）方 橘（ノ）皮 狼牙 雷丸 分一等（シ）て末（キ）て湯を以て「服（ス）可（シ）。方寸（ノ）

375

ヒ。『ヒト』日(ニ)一(タヒ)。虫當に盡(ク)出(ツ)「當」(シ)。
 ● 錄驗方(ニ)、寸白を浴(スル)方 大(キナル)檳榔「廿枚(碎(ケ))」葱白「葱白」切(レル)一升、或一合、凡(ソ)三物水五升を以て煮て二升半を「取(リ)て頓(チ)服(セヨ)」。即(チ)下(ス) 今案(スルニ)酢に雄黄を研(リ)て之を付(ケヨ) 又方(ニ)「酢に檳榔(ノ)子を研(リ)て付(ケヨ)」之 又方(ニ)胡桃(ノ)子を研(リ)て之を付(ケ)、并(セ)て食(セヨ)「之」 又方(ニ)芥(ノ)子上(ノ)如(クセヨ)

● 蛔虫を治(スル)方第十九

400

● 病源論(ニ)曰(ク)、蛔虫(トイフ)は「者」是(レ)、九虫(ノ)「之」内の一虫(ナリ)「也」。長(サ)一尺、亦、「長(サ)五六寸有(リ)」。或は府藏の虚弱(ナル)に因(リ)而動(ク)。或(ハ)甘を食するに因(リ)て化(シ)而動(ク)。「其(ノ)發動(スル)ときは「發動(セ)は「則」腹痛(シ)」。發(リ)「發(リ)て」腫、聚(セ)作(シ)て上(リ)下(リ)に行(キ)來(リ)て痛(キ)こと休(リ)止有(リ)」。亦心を攻(メ)て痛(シ)。口喜(ミ)て吐(ク)キ涎(レ)、及(ヒ)、清(ク)水を吐(ク)。腸心を貫(ク)、者(ハ)「則」「死(ヌ)」。新録方(ニ)、蛔心痛(クシ)て發(ル)と(キ)に「發(リ)て」水を吐(ク)を治(スル)方 練(ノ)樹(ノ)東「南の下(ノ)根」露(ハナラ)不(ル)、者を取(リ)て切(リ)て一升。水二升を以て煮て一升を「一升」取(リ)て滓を去(ケ)て七合(ヲ)服(セヨ)。十里久(シク)アリて更に、餘(レル)者(ヲ)温(メ)て服(セヨ)「之」。當(ニ)蛔三百枚を利(シ)て差(ユ)「當」(シ)。其(ノ)練は着(ツ)ケル者(ヲ)「取(レ)」。雌練と名(ツク)。毒微(カナリ)。「雌」(ト)名(ツク)。「練は毒微(カナシ)て」子无(ク)は、雄練と名(ツク)。毒烈(シ)。「子无(ク)は雄」名(ツク)。「練(ハ)毒烈(シク)て」

405

或(ハ)人を殺(スニ)至(ル)、[者]。諸(ノ)虫(ノ)病八月ノ上旬療(セム)と欲(ヨ)之[之]。中旬已後は虫、[虫]。[藥を下(ス)トモ中(ラ)不(之)]。●廣洛方(ニ)云(ク)、蛔虫、寸白を治(スル)方 酸(ス)キ石「糶(ノ)根を取(リ)て切(レル)ニ升。土七寸を入(レ)て東引サセル者 檳榔十枚、(碎

(キ)切(レ)」。[水七升をモ(テ)煮て二升六合を取(リ)て滓を絞(去)ケ)て少(末(キタル)を着(レ)て煮て稀(カユ)糶(カユ)稀(カユ)糶(カユ)に作(シ)て平晨に空腹に頓(ク)食(セヨ)之[之]。少間(オク)て虫死(ニ)て快利(セ)は差(ユ)」。●錄驗方(ニ)、蛔を治(スル)薑(一)苳湯(一)薑苳湯(ノ)方 薑苳(ノ)根二斤 洗(ヒ)て細(カク)切(リ)て「水七升を以て煮て三升を得て食(タ)先(タ)食(ヨ)リ先(ニ)盡(ク)飲(メ)之[之]。入弱老(ナラ)は分(ケ)てニ(タ)服(セヨ)之[之]」。一宿に蛔悉(ク)爛(レ)下(ル)。人強(ク)は「者」盡(ク)に服(セヨ)之[之]

●^{知消反} 蛔虫を治(スル)、方第廿

●病源論(ニ)云(ク)、蛔虫(トイフ)は「者」[者]猶是(レ)、九虫(ノ)内の一虫(ナリ)「也」。形甚(タ)小(サクシ)て今(ノ)「之」^{百物類}蛔虫(ノ)状(ノ)如(シ)」。府藏虚(弱)ナル(ニ)因(リ)て「而」發(動)するを致(ス)。[致(ス)に]甚(シキ)者は「則」、「能(ク)、痔、瘻、疥、癩、癬、癰、疔、疔諸(ノ)瘡を成(ス)」。此是(レ)人體虚(シク)は極(メ)て「重(シ)者」。故に蛔虫動作(スル)に因(リ)て「因(リ)て」動作(シ)て「爲(サ)不(ヒ)イフ(コト)無(シ)之[之]」。●様要方(ニ)云(ク)、長虫、赤虫、蛔虫 寸白を「療(スル)方 薑苳(一)苳(一)根を以て水七升を以て「煮て二升を、二升」取(リ)て分(ケ)てニ(タ)服(セヨ)」。《今案(スルニ)新錄方(ニ)薑苳(ノ)根二斤

445

【・范汪（カ）方（ニ）蟻虫を治（スル）方 練（アキ）實苦酒（ミ）苦（ク）酒（ス）（ノ）中に淳（シ）て綿を以て「裹（ミ）
 「之」て穀（ノ）道（ノ）中に塞（サセ）ク」。ニ寸を入（ラ）令（メ）て日に易（ヘヨ）
 ・録驗方（ニ）蟻（ミ）虫
 の穀道（ノ）中に在（リ）て痒（リ）、或（ハ）痛（キ）を治（スル）方 附子（ツクシ） 干薑（カンキヤウ） 薑（カウ） 蜀椒（シヤクカウ）（各
 一兩）搗（キ）篩（ヒ）て綿に裹（ミ）て穀（ノ）道（ノ）中に内（レヨ）。再（ヒ）罨（クル）に過（キ）不（シ）
 て良（シ） 【・新録方（ニ）蟻（ミ）虫を病（ミ）て或（ハ）心を攻（メ）て痛（キ）こと列（ス）か如（ク）
 シ）て口に清（ス）汁を吐（ク）を治（スル）方。生（シキ）艾を「搗（キ）て汁（ヲ）絞（リ）取（リ）て宿（ル）
 と（キ）に「宿（リ）て」食（スル）こと勿（クシ）て「勿（レ）」。清朝に、一升を飲（メ）。【・飲（ミ）
 當に虻を下（ス）【當（トウ）（シ）
 ・又方（ニ）練（ノ）木（ノ）根を取（リ）て判（キ）【之】て水を以て煮
 て濃（キ）赤（ク）黑（キ）色（ナラ）令（メ）て汁を以て米に「合（セ）て煮（カ）強（カ）キ糜（カ）に作（シ）て宿
 （ル）と（キ）に「宿（リ）て」食（スル）こと勿（クシ）て清（ス）朝に食（セヨ）【之】。稍（ク）に、一ヒ
 從（ヒ）始（メ）と爲（シ）て「小（シ）息（イ）フて復（シ）一ヒを食（ス）半升（ノ）糜を食（シ）て便（チ）虻を下
 （ス）。秘方（ナリ）「又方（ニ）蕙（ク）一莖（ヒ）根（ヒ）二斤 細（カク）判（リ）て水七升を（モ）て煮て三升を
 取（リ）て分（ケ）て再（ヒ）服（セヨ）。亦、【以（カ）糜（カ）に作（ス）可（シ）

醫心方卷第七

430

注

- 1、左傍後筆訓「シリノヒスヘ」。
- 2、左傍緑筆「女方反」。
- 3、後筆返点「レ」と仮名「ニ」。
- 4、右傍訓「コフ」の下に後筆「シ」。
- 5、「似」の下に「似_ニ」とあり。
- 6、書陵部本には「暖_{ヌグ}メテ」とあり。
- 7、頭注「蝕」敗瘡也「麩如蟲」食草「木之葉」あり。
- 8、左傍緑筆擦消「荻オキ」。
- 9、「射」に頭注「射者麝欵」あり。
- 10、「搗節」の右傍に後筆訓「ツイ・フルイ」あり。
- 11、五十九行末への転倒符あり。
- 12、後筆返点「レ」と仮名「ト・ヲ」。
- 13、後筆返点「レ」と仮名「ニ」。
- 14、後筆返点「一」と仮名「ヲ」。
- 15、後筆返点「ニ・レ」。
- 16、後筆仮名「メ」。
- 17、一字欠落か。仁和寺藏医心方卷第七にも該当字なし。
- 18、左傍緑筆擦消「雙」。
- 19、百二十六行頭への転倒符あり。
- 20、朱書にて「等」を訂す。
- 21、書陵部本には「カハル／＼」とあり。
- 22、書陵部本には「廣(サ)を」とあり。
- 23、書陵部本には「衣帯を」とあり。
- 24、頭注「玉篇曰」瑞「徒計徒」結「切」隱蔽兒」あり。後筆

か。

- 25、朱書にて「裏」を訂す。
- 26、左傍緑筆擦消「女方反」。
- 27、「合」一字欠落か。仁和寺藏医心方卷第七には「塩一合・合・煮」とあり。
- 28、二百三十七行への転倒符あり。
- 29、本文「戒」に「戒欵」とあり。
- 30、後筆仮名「牡」に「ホ」、「牝」に「ヒシ」。書陵部本には「牝一痔」、「腸痔」とあり。
- 31、書陵部本には「牝(送)痔ハ」とあり。
- 32、頭注「更衣」如廁云々、ユク」。
- 33、書陵部本には「云」とあり。
- 34、頭注「野鶉」痔病名云々」。